

Title	哲学教育において評価はどう行われるべきなのか
Author(s)	森, 芳周
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 8, p. 26-28
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/10577">https://hdl.handle.net/11094/10577</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 哲学教育において評価はどう行われるべきか

森 芳周

はじめに

昨年2月に行われた臨床哲学研究会の記録を読んで、この文章を書いている。私は研究会での質問者の一人であった。(13ページから始まるディスカッションの発言者Mが私である。)改めて記録を読み返していると、「哲学の教育」という研究会のテーマの中では、私の質問は場違いなもののようにも思う。私は、哲学の教育の中で、評価はいかにして行われるのかというような質問をした。こういった質問は、大塚氏や堀氏の具体的な授業実践についての議論を深める方向には行かないようにも思われる。なぜなら、私の質問に対する堀氏と大塚氏のこたえにもあるように、評価は学校のシステムの中に存在してしまっていて、能力を測ることができるものと考えてではなく、仕方がないものと割り切って考えていかなければならないものかもしれないからである。だが、この評価の問題は、「哲学の教育」を考える際には、そして特に高校のカリキュラムの一つとして哲学の教育が行われる際には、無視してはならない問題だと感じる。このことについて、少し詳しく述べようと思う。

高校で「倫理」という科目を担当し、独自の工夫をして授業をしている大塚氏と堀氏の話からは、この倫理という科目を教えることの苦勞が伝わってくる。大塚氏の発表では、そもそも哲学とは誰かが誰かに教えうるものなのかという疑問や、学校教育システムの枠

組みという制約の中に哲学教育が置かれていることが示され、その中で授業を組み立てていかなければならないと言われている。堀氏は、当時は府立高校に勤務しており、生徒たちの意識を社会的なものにつなげていくこと、社会に出たときに「自分の人生をデザインできるような学生をつくること」を課題として授業に取り組んでいる。このように、「哲学の教育」そのものをまず考えるのではなく、その前に、教師や、倫理という科目、そして生徒が置かれている状況を的確に認識し、その上で「哲学の教育」を考えていかなければならないという立場にある。私の投げかけた「評価」についての質問もこの延長線上にある。

## 哲学の教育と評価

「哲学の教育」について話されている場で、定期テストがどうのという評価のことで口を挟むことがどこか場違いな感じがすることについて、大塚氏が発表の冒頭で「哲学が学校で教えられるということが不思議な気がしています」と述べていることと関係があるだろう。倫理という科目はやはり数学や英語とは違って、本気で教えようとするほど、そして「自分の頭でものを考える」ということを追求すればするほど、学校教育システムの中には収まらない。つまり、倫理という科目で追求される目的は、評価というシステムで判定される能力ではもはやなくなってい

る。こういった意味で、「哲学の教育」と評価は相容れないものと言える。

しかし、それでも、現実に「哲学の教育」が行われている「倫理」は高校の授業科目の一つであり、評価が行われる。そして、評価というものは、生徒の意思決定に非常に大きな役割を果たしているという事実は見逃せない。例えば、授業中どんなに騒がしいクラスでも、教師が「このあたりテストに出るよ」と言うと、一瞬だけかもしれないが、静かになり生徒は真剣にノートを書き始める。こういった手段が通用するのも、評価というシステムが生徒に浸透しているからだろう。もちろん、大塚氏と堀氏の哲学教育の実践がこういった例に当てはまるのかと言えば、当てはまらない。だがそれ以上に、私には気になることがある。高校の倫理であれば、定期テストで知識を問うたり、一定の理解を見るための評価が必要であるということには問題をそれほど感じない。その授業で、意見表明やディスカッションを行うことや、「自分の頭でものを考える」ということが特に強調されることに気なるものがある。「哲学の教育」ということで、あることについて意見表明やディスカッションなどを行うときでも、評価とは関係ないと教師の頭の中ではそう思っているにもかかわらず、授業という場で行われるならば、評価の対象へと陥っていくと感じる生徒もやはり存在するのではないだろうか。生徒の意見表明の中に、別の目的を持った教師が存在することで、公的な議論でもなく、私的なおしゃべりでもないような不安定な場ができあがってしまう。それは、数学や英語、国語といった教科で行われるような、答えを握った教師が、その答えを生徒に答えさせるというコミュニケーションに——過去

の臨床哲学研究会で浜田寿美男氏が、このようなコミュニケーションの構造の問題を指摘していた——なりかねない。

#### 哲学の授業における コミュニケーションの問題

こういった要素が「授業という場」という共通性だけから、「哲学の教育」でも存在するというのには言い過ぎであり、大塚氏と堀氏の実践からも見えはしない。だが、「哲学の教育」つまり「自分の頭でものを考える」という授業では、より難しい問題につきあたる。浜田氏の指摘していた教師生徒間のコミュニケーションは、教師が答えを知っていて、それを生徒に答えさせるということで、そこでは確認作業が行われているだけだが、「哲学の教育」という場では、「自分の頭でものを考える」ということによって、決まった「答え」は求められてはいない。つまり「答え」が評価の対象となるのではなく、「考える」ことまでもが授業の中で求められていくことになる。そもそも哲学にとっては、決まった一つの解答を導き出すことにほとんど意味はなく、個人個人の思考のプロセスが重要になる。つまり「考える」ことが求められる。こういった授業はある生徒にとっては、他の教科の授業とは違って、解放感を味わい、喜びを感じて授業に臨んでくれるかもしれない。だが、哲学という学問が求めているものと学校や授業という場が求めているものとの間で、混乱する生徒もいるかもしれない。

高校の英語や国語、数学といった教科は考えさせるにしても、一つの決まった解答が求められる。教える側の気持ちとしては、倫理や哲学の勉強や授業が、こういった解答を導くための「作業」となってしまうことは避け

たいことだ。だが一方で、教えられる側の生徒にとって、哲学や倫理が求めることと、一つの決まった答えを導き出す作業という落差の問題をどう理解すべきなのだろうか。

おそらく英語や国語や数学や理科といった、倫理以外の教科や科目も、生徒が自分自身で考える力をつけることを目指しているだろう。だが、そういった教科や科目は、カリキュラムや授業というシステムの中にうまく適合して、教える側も教えられる側も安定した空間、つまり、「教える - 教えられる」という関係が完全になりたつ空間をなしている。この関係がよいものか悪いものかは別にして、生徒がこのことを納得するならば、窮屈なものではあるが、同時に、決まり切ったコミュニケーションが行われる場の中で居心地のよさも感じられる。しかし、倫理や哲学は、この関係を揺さぶるものがある。教える

べき内容や答えを、教師は必ずしも持っているわけではない。この場合、「教える - 教えられる」という関係の中で、窮屈さを感じながらも、その関係を納得している生徒にとっては、教える側の者がそこで教えるべき内容や答えを持っていないという授業は、逆に居心地の悪さを感じてしまうだろう。安定した関係とは、自分の発言や導き出した解答が、教師によって評価の対象とされることを生徒が納得している状況であるが、「教える - 教えられる」という関係の中で、評価の対象となるはずの、その解答が隠されたままのコミュニケーションというのは、生徒と教師の関係と授業をどのような方向に導くものなのであろうか。理想的な哲学の教育と、その教育が行われる学校や授業という場に特有の——評価が常につきまとう——状況には、大きなギャップが存在している。(もりよしちか)

2001.3.24

報告

MAP CLUB 「ナースがケアで立ち止まるとき」

桑原英之

去る3/24、メディカ出版のマップクラブ(注)に臨床哲学研究会が協力して、ナースを対象とするイベントを行った。当研究室の西川(博士課程前期、看護師)がプランナーとなり「ナースがケアで立ち止まるとき」というテーマで企画した。ナースが自分のケアを省みることができない理由は「業務に追われて忙しい」という看護現場の状況から語られることが多い。だが業務に忙殺されているのは事実間違いないにしても、そこからもう一步踏み込んでケアについて考え、

別の観点から問いをたてる作業をナースたちに提案してみよう、というのが今回の企画の意図である。イベント内容を概観しておく。まず先のテーマに関する体験を2人のナースに「体験トーク」という形で話してもらい、それを受けてグループワークを行った。次に各グループで行われた議論の内容をレジュメにして発表・配布し、その発表も参考にしながら5人のスピーカーに「キートーク」という形で発言してもらう。最後に中岡が今回のイベントのまとめも兼